

特集：患者への図書サービス

欧米の病院図書室における患者サービス

菊池 佑

1. はじめに

経済一流、生活二流、政治三流とは日本社会のことを言うらしいが、さて、それでは日本の医療サービスは何流であろうか。見る人の立場や問題意識等によりもちろん異なるであろう。さらに、病院内での患者用図書サービスについてはどうであろうか。実際には等級をつけることは不可能である。なぜならばシステム（制度）がないからである。何流と言うべき対象そのものが欠落しているのである。

2. 患者用図書館の発祥

患者図書館の萌芽は古代ギリシアやアジア、アフリカに見られる。⁹⁾ 書物が人の心に影響を与え、時として治療的効果をもたらすことに人類は古くから気づいていた。紀元前には古代ギリシアの都市テーベの図書館の入口には「魂に薬を」という刻銘が掲げられていた。2世紀には小アジアの古都ペルガモンに患者用図書館があった。また、1272年に建てられたカイロのアル・マンスール病院では、内科・外科的治療の他に、司祭が患者に昼夜コーランを読ませて回復の促進を図ったという¹⁰⁾

3. なぜ欧米で患者用図書館が発展したか

アル・マンスール病院の例に見られるように、読書の治療的効果は、まず宗教と結びついて認識

された。アメリカのマサチューセッツ総合病院では、1811年（日本では江戸時代）に患者に聖書と宗教書を与えることが決められ、1823年には購入費が捻出された。その後、蔵書は宗教書から道徳書、そして一般書へとその幅を広げ、今日の公共図書館の蔵書構成とほぼ同じものになった。

20世紀に入ると、人類は大規模な戦争を経験することになる。1914年に第一次世界大戦が勃発した。傷病兵の心の慰めと勇気づけを行うために軍事病院に本を送り届ける「戦時図書館」活動がイギリスで民間人によって組織され、英国赤十字社がこれに協力し、また政府はこの活動に限り郵送料を免除したため、予想をはるかに上回る大規模な図書館活動が展開された。

さて、近代精神医学の進歩に伴い、読書の治療的効果（therapeutic value of reading）が科学的に見直された。アメリカではメンンジャー（M. Menninger）が当時精神医学の指導的立場にあった兄（K. Menninger）と共に、精神療法の一つとして読書による治療すなわち読書療法をメンンジャー・クリニックで5カ年にわたり研究し、その成果を1937年に発表した。読書および図書館の価値と役割について医学的見地からの理論が出されたことが、患者図書館の存在を確固たるものにした。

4. 欧米各国の病院

(1) アメリカ

①マサチューセッツ総合病院（ボストン、1,100床）専用の図書室が1841年に開設されて以来、150年以上の歴史を持つ。筆者は1975、1985年の2度

にわたり当図書館を見学したが、いずれの時も利用者の出入りが多く、電話による問い合わせも盛んであった。しかし、この間アメリカ経済の弱体化の影響を受け、病院財政も危機に陥り、図書館スタッフの数3名(パート含む)から1名に削減されていた。図書室内でのサービスの他に病棟巡回貸出と映画会や音楽会の催しもあり、ボランティアの助力により、サービスの維持に努めている。

いずれにしても、当院は専任司書担当による患者図書館サービスを長年にわたって続けている世界でも代表的な病院である⁽⁵⁾⁽¹⁰⁾。

② 在郷軍人病院 (ペンシルヴェニア州バトラー, 375床)

在郷軍人局の病院(略称 VA)は政府機関の病院であり全米各州に存在する。注目すべきことは、そのほとんどの病院が法律により「医学図書館と患者図書館」を有していることである。病院図書館の「基準」も作られている。

バトラーのVA病院では、患者用図書館は事務室を含めて4室を持ち、床面積は合計150㎡と広く、ゆったりした感じを与える。入口付近の室は、じゅうたんが敷かれ、窓際にソファがあり、新聞16紙と参考図書や大活字本が置かれている。

この図書館は「患者教育リソースセンター」としても意欲的である。患者が自身の病気に関して理解を深めることができるよう医師やその他の専門家の推薦した資料を司書が用意し患者に提供している。つまり、娯楽書や一般書のサービスにとどまらず、患者の保健教育も今や患者用図書館の重要なサービスとなっている⁽⁵⁾。

③ セント・エリザベス病院 (ワシントンD.C., 精神病院, 1,500床)

病院の広大な敷地内にパン屋、美容院、理髪店、公会堂、レクリエーション・センター、図書館、消防署、警察署などがあり、敷地内を定期バスが運行している。

ここは法律に基づいて設立された連邦立病院で、精神病院の分野では指導的役割を演じてきており世界的に有名な病院である。図書館は独立した建物である。床にはじゅうたんが敷かれ室内は外光が十分に入り明るく快適である。患者と病院職員が気軽に新聞や雑誌を読み、本も借りている。また、患者はリハビリテーションの一つとして図書

館の仕事を司書の指導の下に行っている。音楽室があり好みの音楽を聴くことができ、レコードやカセットも借りられる。映画会は地下一階で行われている。

以上のように、当図書館は地域共同体の中の図書館つまり公共図書館に酷似している⁽⁵⁾。

(2) イギリス

① セント・トーマス病院 (ロンドン, 総合病院, 1,200床)

テムズ河畔にあり、対岸には議事堂(ビッグ・ベン)がそびえ立っている。

患者用図書館は1853年ごろに始まるが、英国赤十字社が1928年に図書館の運営を引き継いでから発展し続け、1950年に専任司書が採用された。現在、数名の図書館職員がいる。床面積は150㎡と広い。入口付近の新聞・雑誌コーナーには、ティータムや昼休み時間に病院スタッフが息ぬきにやって来る。筆者が見学の時(1976年と1987年)も白衣の人たちが数名いた。つまり、当図書館は単なる患者用図書館ではなく、病院の全住民に開かれた図書館であるため「病院一般図書館(Hospital General Library)」と呼ばれている。

なお、その他にもイギリスには素晴らしい患者用図書館があるが紙数の制限により割愛する(詳しくは文献⁽¹⁰⁾参照)。

(3) スウェーデン

英米に遅れてスタートしたスウェーデンの患者用図書館サービスは、今や質量ともに両国を追い越し世界のトップを走っている。患者用図書館を決して特殊扱いしていない。図書館は、「いつでも、だれでも、どこでも」利用できるのが当たり前という考えが定着している。つまり1人の人間が健康な時には最寄りの公共図書館を、また入院した時には病院の中の図書館を利用する。病院スタッフも同様で、病院内にいる時は最寄りの図書館つまり患者用図書館を利用できる。このシステムが公費によって長年維持されている。

通常、患者用と医学用の両図書館は「隣接」さ

れており(あるいはフロアが上下)、2種類の図書館にはそれぞれ専任司書がいる。驚くべきことは、患者用図書館の「床面積」と「図書館担当者数」が医学図書館のそれらよりも多いということである(詳しくは文献(7)(10)参照)。

(4) その他の国々

イギリス、アメリカ、スウェーデンの他にフランス⁽³⁾やドイツ(旧東西⁽¹⁰⁾)、ポーランド⁽⁴⁾でも全国的に患者図書館サービスを行っている。

5. 日本の現状と今後

2度にわたる全国調査によれば、ボランティアや公共図書館による病院への訪問図書館サービスは全国の諸都市で見られるが、病院の司書担当による患者図書館サービスは今のところ京都南病院でしか見られないようである。

21世紀になろうとしている今、そしてまた、教育制度が発達し、経済的豊かさも得た今、もはや文化の空白地帯が存在することは許されない。入院したからといって教育文化活動を停止させられる理由は何一つない。

「日本の病院にも文化を」の実現をめざして筆者は1974年に「日本病院図書館研究会」を設立し、日本に患者用図書館を普及させるための運動を続けている。調査・研究・出版(『病院図書館』年2回刊行)、そして病院内での実践としての図書館ボランティア活動などで関係者たちに、患者用図書館の必要性を訴え、また身をもって示してきた。これまでマスコミが何度も取り上げてくれたこともあって着実に賛同者が増えている。医師自身からの問い合わせも舞い込むようになった。また病院職員自らが立ち上がって図書館サービスを開始したところもある。さらに、公共図書館が地域サービスの一環として病院も含めるところが増えつつある。理解を示す医学図書館員も漸増している。

6. おわりに

アメリカで見学の時に、「病院図書館をお願い

します」と電話をかけると、交換手が、「医学用ですか? 患者用ですか?」と聞き返してくることがよくある。一方、日本では図書館と言えば医学用(研究用)と同義語になってしまっており、電話で「患者用図書館をお願いします」と言えば、「えっ、そんなのあるんですか?」と交換手が驚きの声をあげる。この現状を1日でも早く改めたい。

《 参 考 文 献 》

- (1) 菊池佑:「患者に対する図書館サービスの現状・1974」「図書館界」27(1):1-5,1975.
- (2) 同:「日本の病院図書館1984-85」「同誌」37(6):269-278,1986.
- (3) 同:「フランスの病院図書館」「同誌」35(6):270-281,1984.
- (4) 同:「ポーランドの病院図書館」「同誌」37(5):229-237,1986.
- (5) 同:「アメリカの病院図書館1985-86」「同誌」39(4):137-149,1987.
- (6) 同:「病院図書館はなぜ必要か」「出版ニュース」No1520:8-11,1990.
- (7) 同:「病院図書館:世界(IFLA)と日本」「同誌」No1542:8-11,1990.
- (8) 同:「患者用病院図書室の現状:英米の図書館活動と日本を比較して」「病院」37(12):991-995,1978.
- (9) 同:「シリーズ・人間と看護を考える:本と子ども(対談)」「看護展望」15(11)~(13),1990.
- (10) 同:『患者と図書館』(共編著)明窓社1983.

1、病 院 名	ゴールド・ウ ォーター記念病院	マサチューセ ッツ総合病院	ニューヨーク 大 学 病 院	モ ン ト フ ィ オ ー レ 病 院	ニューイング ランド・バプ テスト病院
2、病院の種類	慢性病・長期	総 合	総 合	総 合	総 合
3、ベ ッ ド 数	912床	1,100床	950床	750床	245床
4、図書館開設年	1974	1841	1937	1912	1930
5、図書館の面積	150㎡	70㎡	70㎡	70㎡	20㎡
6、図書館開室時間1週	52時間	35時間	39時間	40時間	20時間
7、図書館管理経営の型	個別・独自	個別・独自	個別・独自	個別・独自	統合・独自
8、図書館職員	2人(1フルタイム 1パート)	1人	2人	1人	1人
9、ボランティア	7人	15人	30人	21人	数人
10、図書館予算	3,300ドル	未回答	66,000ドル (含サラリー)	20,000ドル	10,000ドル
11、図書館の財源	病院	病院	病院と財団	病院	病院
12、図書館資料					
本	4,384冊	7,000冊	10,000冊	3,000冊	2,000冊
雑誌	38タイトル	40タイトル	60タイトル	19タイトル	3タイトル
新聞	2 紙	2 紙	2 紙	1 紙	1 紙
保健教育資料	131	300	1,100	610	
13、A V 資 料					
トーキングブック	50	50	120	0	31
カセット	24	260	300	0	15
レコード	652		0	0	0
フィルム	0	25	0	0	0
フィルムストリップ	0	20	20	0	0
ビデオ	8	18	0	0	
14、貸 出					
本	2,214冊	15,600冊	28,928冊 (含む職員)	8,000冊	2,500冊
トーキングブック	1,275	80	160	0	35
カセット	295	520	595	0	17
レコード	1,504		0	0	0
15、各病室巡回1週	2週に1回、30病棟	週に1回、24病棟	週2回、17病棟	週1回、25病棟	週4回、4病棟
16、朗読サービス	週1回	不定期	していない	週1回	不定期
17、読書補助具					
	拡大鏡	拡大鏡	ブックスタンド	ブックスタンド	なし
			拡大鏡	拡大鏡	
			プリズム眼鏡		
18、展示・催し物	している	している	していない	していない	していない
19、読書療法	週1回、詩療法	していない	していない	していない	している
20、公共図書館の協力	本の郵送貸出、 映画・ビデオ借用	本の郵送貸出	あり	なし	なし
21、備 考					